



地域・駅・新幹線ニュースレター

はっしん！ 新青森

青森県立青森西高等学校
Aomori Prefectural Aomori Nishi Senior High School

青森大学
AOMORI UNIVERSITY

2026年5月20日(水)
第71号【隔月刊・FREE】

青森大学・青森西高等学校
高大連携事業
協力：JR 東日本新青森駅

青森大学社会連携センター

「彩りとかたち」4作家を紹介

青森県立美術館 コレクション展 2026-1

石井康治、成田亨、村上善男、棟方志功

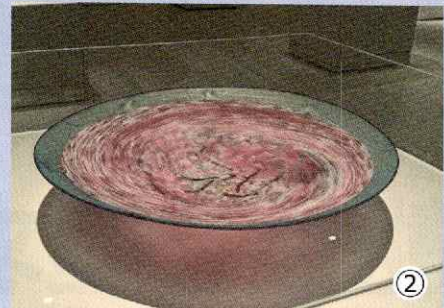
青森県立美術館で6月21日(日)まで、コレクション展 2026-1「彩りとかたち 1」が開かれています。青森の四季をガラス作品にうつしとった石井康治、彫刻家として、さらに特撮美術監督として活躍した成田亨、弘前大学教育学部の教授を務め東北の風土と美術の前衛表現の両立を目指した村上善男、そして板画家・棟方志功と、青森県ゆかりの4作家を特集し、色彩とフォルムに着目して作品を紹介します。同館は今年7月、創立20周年を迎え、記念の企画展などが開催されます。

石井康治は1946年、千葉県に生まれました。青森市の北洋硝子の職人たちと創作を続けるうち、豊かな自然に魅せられ、1991年に同市に工房を開設。創作テーマとして「詩・季・彩(し・き・さい)」という言葉掲げ、春夏秋冬の光と風を色ガラスで表現しました。今年は生

誕80年、そして1996年の急逝から30年に当たります。

代表作「樹映」(写真①、左から「春の景」「夏の景」「秋の景」「冬の景」)、桜の花びらが青空を映しながら水面に浮かぶ様子を描いた「花映盤」(写真②)など、引き込まれる作品が並びます。「彩列文器」(写真③)は制作過程の写真が動画化され、ガラスに命が吹き込まれる過程を知ることができます。

村上善男は1933年、盛岡市に生まれ、1982年から2004年まで弘前大学に籍を置きました。没後20年の今年、ゆかりの東北7カ所で追想企画が開かれています。多く

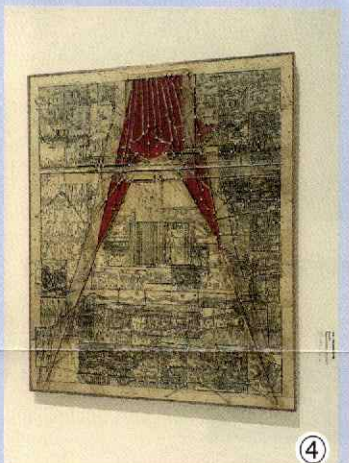


の注射針を埋め込んだ若き日の異色の油彩画、裏返しの古文書を画面に張り、釘を打つように白い点を描いて線で結んだ「釘打ち」手法の作品(写真④、「津軽・十腰内赤倉澤釘打之圖」)などが並びます。

棟方志功は「色を混ぜずに原色を並べた表現が特徴」(菅野品・美術統括監)といい、鮮烈な印象の一因が分かります(写真⑤、流離抄)。また、成田亨の展示では宇宙人や怪獣デザイン原画と彫刻作品を紹介しています。

観覧料は一般700円、大学生400円、18歳以下および高校生は無料。5月25日(月)、6月8日(月)は休館です。

20TH
青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART



北海道・北東北の縄文遺跡群 世界遺産登録5周年

記念特別展「北の縄文世界—円筒土器文化をさぐる—」

三内丸山遺跡センターで6月21日(日)まで、「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録5周年記念特別展「北の縄文世界—円筒土器文化をさぐる—」が開かれています。縄文時代前・中期、北東北から北海道にかけて花開いた円筒土器文化について、祭祀具の発達、他地域との活発な交流・交易、拠点集落の出現といった特徴から詳しく紹介しています。

円筒土器はバケツを上下に細長く引き伸ばしたような形が特徴です。縄文時代前期中頃(約5,900年前)から中期中頃(約4,800年前)まで使われ、その文化は青森県を中心に、北海道の南部、秋田県と岩手県の北部まで広がっていました。

江戸時代後期、紀行家・菅江真澄は著書「栖家能山」(すみかのやま)で、現在の青森市三内で出土した円筒土器や土偶の図と記録を残しています。1920年代、東北帝国大学教授・長谷部言人(はせべことんど)は、五所川原市のオセドウ遺跡と八戸市の一王寺遺跡の調査に基づき、両遺跡から出土した土器を「円筒土器」と命名しま



三内丸山遺跡



した。彼の下で働いていた山内清男(やまのうちすがお)は、「円筒下層式」を縄文時代前期、「円筒上層式」を中期の土器と位置付け、研究の基礎を築きました。

展示では、年代による器形や文様の移り変わり、隣接地域の土器の影響を分かりやすく解説しています。また、北海道や長野から運ばれた黒曜石をはじめとする石器、北海道産の緑色岩などで作られた石斧、鹿角やイノシシの牙で作られた櫛、ヘアピンといった装飾品、新潟県糸魚川周辺で産出するヒスイ、さまざまな表情と意匠・サイズの土偶、凝灰岩を人の形に加工した岩偶など、円筒土器文化を彩る出土品を紹介しています。

さらに、集落の規模や建物・施設の構成と配置、中心的な集落と周辺の集落の関係性が時代とともに移り変わ



ること、土坑墓(大人の墓)の形や副葬品も地域と時代によって異なることなどを伝え、円筒土器文化が共通性を保ちながらも、さまざまなバリエーションを伴っていた様子がわかります。

三内丸山遺跡センター保存活用課の最上法聖・文化財保護主幹は「縄文時代前期から中期の北海道・北東北では、津軽海峡を越えて『円筒土器文化』が広がっていた。遠方との交流・交易、まつりの道具の発達、拠点集落の出現など、農耕社会以前の定住の発展を支えた文化としてとても興味深い」と話しています。

観覧料は一般800円、大学生等400円、高校生以下は無料。特別展観覧料で遺跡を含む常設展も見ることができます。5月25日(月)は休館です。



新青森駅 八幡馬・遮光器土偶のモニュメント

新青森駅に、切符の「ロール芯」を利用したオブジェ2体が登場し、利用者の目を楽しませています(写真①)。制作したのは、同駅エリアを学区とする青森市立新城中学校の総合文化部の生徒たちです。SNSでも見事な造形と話題を呼んでいます。



オブジェは、青森県南部地方に伝わる、馬をかたどった郷土玩具「八幡馬」(やわた



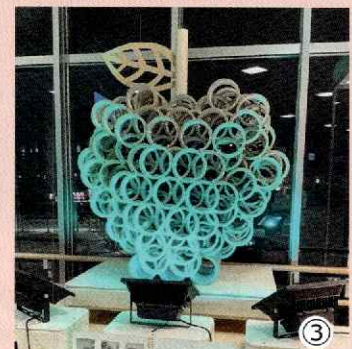
うま)と、青森県などで出土する縄文時代晩期の「遮光器土偶」です。在来線改札口の入り口左側に設置されています。

駅で発行されている切符はロール状に巻かれており、最後に廃材として芯が残ります。オブジェはこの芯を再利用し、総合文化部の生徒たちが部活動の時間を活用して制作しました(写真②)。

これらのオブジェは2代目と3代目です。初代オブジェはリングをかたどっており、青くライトアップされ(写真③)、昨年12月～今年3月に開かれた青森県・函館観光キャンペーンの期間中、新青森駅を代表するオブジェ「りんごの鈴」(写真④)と並んで展示されました。吉田和男駅長によると、4月から青森県観光物産館アスパムに寄贈されたといいます。

担当した新青森駅の西村美晴さんは「青森県・函館観光キャンペーン期間に合わせ、地域のみなさまと

共におもてなしの作品を制作したいと考えました。SDGsの観点から廃材のロール芯を活用し、青森県にまつわるデザインを題材にオブジェを制作しました。想像以上にロール芯が頑丈なため、穴を開けたり連結するのに苦労したそうです。そのかいあって、多くのお客さまにご覧いただき喜んでいただいております」と手土産を話しています。



「可能性を追求、挑戦してほしい」 青森西高校・川浪新校長に聞く

青森県立青森西高校に今春、川浪泰浩校長が着任しました。青森県高校体育連盟の会長という重責を担いつつ、2027年度に控えた県立浪岡高校との統合の準備にも取り組みます。「生徒たちには、可能性を追求して、いろいろなことに挑戦して行ってほしい」と学校運営の抱負を語っています。

川浪校長は五所川原市に生まれ、五所川原工業高校、国土館大学を経て教職に就きました。中学1年のころバレーボールを始め、大学までアタッカーとして活躍。教員となった後は主に五所川原地域の高校に勤務し、母校にも務めてバレー部を指導して、何度も全国大会出場

を果たしました。

バレーボールから学んだことについて「ボールをつなぐスポーツ。自分だけが良くなるのではなく、人を思いやることが大切」と語ります。

経済人・稲盛和夫の本を愛読し、彼が愛した二宮尊徳の言葉「至誠の感ずるところ、天地もまたこれのために動く」を座右の銘として誠実な努力の大切さを重んじます。

青森西高校の生徒は「元気で明るく、きらきらしているイメージ」といいます。統合校のスタートに向けて、新たな伝統を築こうと意欲に燃えています。



青森西高校「青西おもてなし隊」がゆく⑦

あおもり桜マラソンのランナー応援

青森県立青森西高校の「青西おもてなし隊」は本年度の活動スタートとして4月19日、青森市で開かれた「2026 あおもり桜マラソン」応援を繰り広げました。

生徒たちは10kmコース折り返し地点に当たる石森橋付近に陣取り、ペットボトルにビーズを入れて作った手製のマラカスを振りながら「ガンバレー！」と声を張り上げました。ランナーたちからはレース後、「とても励みになった」と感謝の言葉が聞かれました。

3年の木立拓実さんは「ランナーの皆さんが手作り応援ボードを見て笑顔になってくれて達成感があった」、同じく間形勇誠さんは「今年初めて参加し、ランナーの方々が応援に手を振って応えてくれて感動した」と語っていました。

また、2年の本間倫さんは「思った以上にたくさんの方が走っていて驚きました。自分も走ってみたいと思った」と振り返っていました。



見学時間 9:00～17:00(入場は閉館の30分前まで)
(春の大型連休中と6月1日～9月30日は18:00)

休館日 毎月第4日曜日(祝日の場合は翌日)、12月30日～1月1日

観覧料 一般:500円(400円) 大学生等:250円(200円)
高校生以下:無料

※()内は20名以上の団体料金
※特別展は別料金。展示内容により変更する場合があります。
※個人観覧者は、青森県立美術館のチケット表示で割引特典あり。
(詳しくは各施設のチケットカウンターまでお問合せください。)

お問合せ 〒038-0031 青森市三内字丸山305
TEL.017-766-8282 / FAX.017-766-2365
URL <https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp>

三内丸山遺跡センター

縄文 徒歩約10分 芸術
三内丸山遺跡センター 青森県立美術館

三つの施設が揃ってすぐ近く。縄文時代と現代を行き来する体験はまるごと10分。縄文と芸術を堪能できる。ここがその体験の場所。

青森県立美術館

開館時間 9:30～17:00(入場は16:30まで)

休館日 不定休(青森県立美術館HP参照)

観覧料 一般700円(560円) / 大学生400円(320円) / 18歳未満および高校生以下 無料

※()内は20名以上の団体料金
※心身に障がいのある方と付添者1名は無料
※企画展は別料金。

お問合せ 〒038-0021 青森市安田字近野185
TEL.017-783-3000 / FAX.017-783-5244
URL <https://www.aomori-museum.jp>

新青森駅 → 三内丸山遺跡センター: 循環バス「ねぶたん号」(東口) 約15分・300円、タクシー(南口) 約10分、徒歩約30分
→ 青森県立美術館: 「ねぶたん号」(東口) 約11分・300円、タクシー(南口) 約10分、徒歩約40分

Facebook ページ Instagram アカウント

<ネット情報>
Facebook ページとInstagram アカウントを開設し、独自の記事・情報を掲載しています。ご意見をお寄せ

下さい。また、PDF版を青森大学社会連携センターのFacebook ページに掲載しています。いずれも、右側のQRコードからご覧いただけます。
☆このニュースレターは、青森大学社会学部・櫛引研究室が企画・制作し、文責を負っています。お問い合わせ、ご意見等は下記連絡先へお願いします。

〒030-0943 青森市幸畑 2-3-1 青森大学社会学部
櫛引素夫 電話 017-738-2001 内線 731
shin-aomori@aomori-u.ac.jp

FB ページ Instagram 青森大学社会連携センター